

書評

室井康成著

『首塚・胴塚・千人塚―日本人は敗者として
う向きあつてきたのか』

(洋泉社、二〇一五年)

内田 力

一、本書の概要

近代国家が形成される以前において、戦没者慰霊の問題はどのようにあつかわれたのか。とくに合戦の敗者はどのように扱われたのか。このような問いかけに答える書が、室井康成氏による『首塚・胴塚・千人塚―日本人は敗者としてう向きあつてきたのか』(以下、「本書」とする)である。

室井氏が注目したのは「首塚・胴塚・千人塚などと呼ばれる塚状の遺跡群」である(本書二頁)。これらは、「いずれも往古の戦争で死亡した人々の亡骸の全部もしくは一部を埋葬し、霊的な処遇を施すために築造されたと伝えら

れ」、「過去の戦死者の記憶の依代よしろとして機能している」遺跡なのである(二―三頁)。ただし、伝承のとおり合戦の戦死者が埋葬されているとはかぎらず、後付けのものが少なくない。それでも、「塚の歴史的真贋がどうであれ、そのいわれを説く伝承からは、これを語り伝えてきた人々の、過去の戦死者に対する想いを汲みとることができると室井氏は主張する(四頁)。本書が目的とするのは「塚に仮託して語られる、人々の戦死者に対する想いを掬いあげること」である(二三頁)。

室井氏によれば、本書は「首塚・胴塚・千人塚といった過去の戦争に関わるとされる塚状の遺跡と、それらをめぐる伝承の、いわば概説書である」(四頁)。本書は、室井氏が日本中に存在する六六五もの首塚・胴塚・千人塚(以下、これらの総称として「首塚」とする)を調査した成果である。本書は一般書であり、室井氏自身が「通史として書いたからこれは概略。これをたたき台に研究してくれる人が現れれば」と述べる。だが、本書は柳田國男の問題提起を受け継ぎつつ、戦後七〇年(二〇一五年)の刊行であることを意識して首塚研究に慰霊という新しい論点をあたえた。その意義は初めに強調しておきたい。

本書の章立ては以下のとおりである。

はじめに

序章 「首塚」は、いかに語られてきたか

第一章 「大化の改新」と蘇我入鹿の首塚

第二章 「壬申の乱」をめぐる塚

第三章 平将門の首塚・胴塚

第四章 「一ノ谷合戦」の敗者と勝者

第五章 楠正成・新田義貞の結末

第六章 「関ヶ原合戦」の敗者たち

第七章 「近代」への産みの苦しみ

終章 「客死」という悲劇

首塚・胴塚・千人塚等の一覧

おわりに

章立てからわかるように、本書はひとつの特徴的な趣向を有している。それは、首塚に関わりのある歴史上の敗者をつうじて、前近代の日本史を通史として語ることである。本書は、被葬者とされる人物の年代の順に章が配列されている。蘇我入鹿から西郷隆盛までが並べられる様子は圧巻である。もちろん、これだけの広範囲を解説しているために、室井氏は最新の研究状況を把握しようと努めているものの、各々の専門家の目からすれば不審な記述もあるかもしれない。しかし、ノンフィクションの一般書ならではの試みである。本書によって敗者の側からみた日本通

史、さらにいえば多声的な通史叙述へと誘導されることだろう。

二、記憶研究・記念碑研究として

このように本書は一般書でありながら、あるいは一般書の体裁をとったがゆえに、歴史学全体に対していくつかの研究上の論点を提起する²⁾。なかでも記憶研究・記念碑研究としての側面は、歴史学の研究者にとっても注目すべき点である。

民俗学者である室井氏による本書を、歴史学にひきつけて読解することに異論があるかもしれない。室井氏自身、本書のなかで民俗学と歴史学を対立的にあつかう。歴史学は史料に基づいて論じ、事実が否かに主たる関心を持つが、室井氏は民俗学に「掘って立」ち、塚の歴史的眞實よりも、伝承が「眞実である」と信じている人々の心情を問う(四、二一頁)。史実と伝承を対比させて、「史書に記された「事実」と、民間レベルで語り継がれてきた「眞相」との間には「中略」大きな落差がある」と書くのも、同様の発想である(五五頁)。

しかし、記憶研究(人々の記憶を対象として文化的アイデンティティや歴史認識との関係を探る研究)が分野を超

えて推進されていることを念頭に置くと、民俗学と歴史学の対立よりもむしろ両者の共通性に目が向く。そこでわたしは、ドイツ史を専門とする歴史家である松本彰による『記念碑に刻まれたドイツ―戦争・革命・統一』を本書の傍らに並べたい。³ 同書は、ドイツ各地に膨大に存在する記念碑、なかでも数の多い戦争記念碑が人々の記憶を映し出す存在であると考え、近現代における記念碑の建造や改変を丹念に追うことでドイツ史を再考する書である。集合的な記憶や感情の媒体として特定の種類の場や立体物を捉える視角は、本書と共通する。本書は記憶研究や記念碑研究としても独自の論点を提供する。一例として、首塚と信仰との関係が挙げられる。いくつかの首塚や胴塚は、現在でも人々にとってたたりや病氣治癒譚のような信仰の対象であり、それが歴史上の敗者と関連づけられて伝承されてきた。この点は記念碑や史跡を考えるときに見逃しやすい点である。そのほかにも、本書の終章で室井氏は、敗者が「客死」したことに對する人々の感情、より具体的にいえば、「客死」を忌み、できうべくんば死者を故地へともどすべきだという心意」を首塚伝承のなかから抽出する(二六八頁)。これも本書独自の視点である。

三、歴史に位置づけられない首塚の存在

先述したように、本書は、被葬者とされる人物の時代順に首塚を解説するが、これにより漏れた問題が存在することを指摘しなくてはならない。

ひとつは、虚構の存在を弔った首塚の存在である。本書は、すべての首塚・胴塚・千人塚を網羅してあつかっているわけではない。具体的に指摘しよう。京都市西京区大枝山にある首塚大明神は、巻末の「首塚・胴塚・千人塚等の一覽」に収録されていない。⁴ 山城国と丹波国の国境に位置するこの首塚は、源頼光に征伐された酒吞童子のものとされており、れっきとした敗者の弔い場所である。にもかかわらず、リストから外された理由は、おそらく酒吞童子が鬼だから、説話上の存在だから、ということになるだろう。しかしこれとても、実際に何らかの征伐があったかどうかにかかわらず、慰霊の場として機能してきたことにはかわりないはずである。

もうひとつは、現代でもなお新しい首塚が創出されている点である。具体的には大阪府枚方市にある「阿弔流為と母礼の塚」である。室井氏の過去の論文では言及されていたものの、本書の「一覽」には収録されていない。この場所が首塚とされるようになったのは、馬部隆弘が詳細に論

じたとおり、一九八〇年代に一部のひとが唱えはじめた説をもとにして、九〇年代以降に官民がその説を伝承だと強弁したためであった。⁶おそらくこの経緯が「一覽」から外れた理由であろう。しかし、本書では伝承の真贋を見極めることを目的にしなかった以上、この首塚は一覽にふくめるべきであった。中世や近世に伝承が創作された例は積極的に紹介しておきながら、現代に創作された例をとりあげないのは片手落ちである。⁷被葬者の時代順に章を構成する本書の手法には魅力が大きく、本節の指摘はないものねだりかもしれないが、本書が首塚等のもつ大きな一側面を捨象していることは、十分に意識して読む必要がある。

四、おわり

本書の読後は、わたしのように首塚を訪れてみたくなるだろう。巻末の「一覽」をみると全国各地に多数の首塚が存在する。手はじめに自宅の近所の首塚に行くのも良い。新聞の地方面をみると首塚に関する記事は存外多いことに気づくので、そこを突見するのも良い。本書が解明したのにしたがって特定の人物に関わる首塚を回るのも良いし、『平家物語』や『太平記』のような文学作品に沿って首塚の分布を再構成するのも面白いだろう。このように本書は

読み手に新しい関心を抱かせ、行動を促す。それは、室井氏の見出したテーマが魅力的であることを存分に示している。

国内実地調査やゼミ旅行、遠方での学会出席の折には、本書所収の「首塚・胴塚・千人塚等の一覽」を確認してから旅程を組むことを読者のみなさまにおすすしたい。

室井康成著『首塚・同塚・千人塚―日本人は敗者としてどう向きあってきたのか』(内田)

註

- (1) 「気鋭新鋭 六六〇か所の塚網羅の通史」(『読売新聞』二〇一六年一月三〇日夕刊、一一面)。
- (2) なお、室井氏は同一主題を専門論文のかたちでも発表している。一般書である本書とは異なる書きぶりなので、ぜひあわせて読みたい。室井康成「首塚伝承考―戦死者埋葬譚のモチーフ分類」(『古城』五二号、二〇〇七年)。
- (3) 東京大学出版会、二〇一二年。
- (4) 首塚大明神についてつぎのような記事がある。山田邦和「まちかど歴史散歩② 酒吞童子の正体―老ノ坂峠、首塚大明神」(『歴史街道』一九九九年六月)。ちなみに、国際日本文化研究センターとおなじ地区に位置する。
- (5) 前掲註(2) 室井論文二二四頁。正確にいうと、枚方市には首塚と胴塚が存在する。室井氏が論文内で言及したのは胴塚のほうである。
- (6) 馬部隆弘「蝦夷の首長アテルイと枚方市―官民一体となつた史蹟の捏造」(『史敏』三号、二〇〇六年)。
- (7) 京都・清水寺は坂上田村麻呂に所縁があることから、一九九四年に岩手県の有志が寺内にアテルイとモレの慰霊碑を建立した(モレは副将である)。このようにアテルイに對する吊いは今日も継承されている。

(東京大学大学院総合文化研究科博士課程大学院生)